

よみがえりのいのちの喜び

— 子羊の群れの葬儀について —

ピーター

私は1990年代のはじめにアメリカより日本に帰国し、以来日本を中心に子羊の群れの仕事に携わっていますが、帰ってきてから一つだけ違和感を感じるものがありました。お葬式です。

アメリカでもたくさんお葬式をしましたが、日本の様子がよく分からなかったので、「郷にいれば郷に……」というわけで、これまで日本式のキリスト教葬儀をしてきました。かつてアメリカの宣教師などは日本人クリスチャンが仏式のお葬式に参列するだけでもダメだと言っていたそうですが、そのためか、お焼香だけは絶対してはならぬというのが日本の教会の禁則として今もあります。

私はそんなカタチにはそれほど目くじらを立てる必要はないと思いますが、私が一番驚いたのは、葬式の規模が大きすぎるということです。それも前夜式と翌日の告別式と2回もあります。お葬式も、仰々しい花輪や絢爛豪華な祭壇があり、中には参列者に食事まで出すところもあります。

直接聞いたわけではありませんが、お葬式の経費など膨大なものでしょう。なぜもっとシンプルで敬虔なお葬式が持てないのだろう……。

そんな時、ある大学の先生が書いた「葬式は、要らない」という本の広告を見て、さっそく購入し読んでみました。日本のお葬式の現状がよく分かりました。それと同時に、わたしたちももっと聖書に基づいたお葬式をした方がいいと思うようになりました。

日本の葬儀費用は世界諸国に比べて破格に高いそうです。3年前の統計で、平均231万円。お隣の韓国で40数万円、派手好みのアメリカでさえ50万円程度だと言うのですから、日本のお葬式がいかに高いか。

日本のお葬式にお金がかかるのは、葬儀社への経費、お坊さんへの謝礼、さらに葬儀に来られた方々への食事代が入っている。もちろん墓の代金など、別払いです。正直な話、貧乏人は死ぬことさえできません。

スタッフの一人が言うには、数年前東北の田舎でした家族の葬儀は、500万円少しかかったそうです。会ったこともない親戚などが続々現れ、3日3晩、飲み食いが続き、おかげで遺族は大変な経済的負担を被ったと言います。

キリスト教式は仏式に比べて安いはずですが、お金の問題だけではなく、二日にわたる儀式を行うと、かなり大変です。わたしたちも日本の慣習だからという

ので、仏式の通夜に代わる前夜式を持ち、さらに翌日告別式を持ってきました。そうしなければならないというルールはどこにもないのに、たんに習慣に合わせてきたに過ぎません。またその都度さんび隊をつかわし、儀式を執り行ってほしいという声がありました。スタッフには芦屋の日曜礼拝を休んで、葬式を礼拝と考え、葬儀中心にしてほしい……。日本中捜しても、いや世界中捜しても、教会スタッフが日曜礼拝を休んでまで葬儀に駆り出される教会があるなら、私に教えて下さい。「死者は待てない」というのが、そういう要求の根拠となったのですが、死者は待てるのです。「死人は死人に任せておけ」と主は言われましたが、何が一番大事なのか考えてみよ。どう考えても、葬式という儀式を第一とするのはおかしいでしょう。葬儀のための葬儀など要らない。

「おくりびと」という映画がありましたね。おもしろかった。死者とそれを見送る者たちとの間に、「つながり」があるから、お葬式も感動となるのです。つながりとは、いのちの continuum(連続体)があるからです。この世から、かの世までつながっている。

このつながりは、信仰とさんびの中で、美しく輝いてきます。敬虔でシンプルなお葬式がいい。仰々しいお葬式など要らないでしょう。

今は日本の葬儀もかなり変化しつつあると言います。いい傾向です。都会を中心に、ワンデー・セレモニーというのが中心になっている。前夜式と告別式を二日にわたってするのではなく、一日のうちに、すなわち一つの儀式だけにするというもの。もちろん葬儀の後の食事などいっさい提供しない。わたしたちも世間体や虚飾の習慣を捨てようではありませんか。葬儀社の言いなりになるのは止めましょう。華美な葬儀をする土台となったのは、平安時代から発達した浄土真宗の影響です。極楽浄土に似せて、絢爛豪華な祭壇を築く。お坊さんの数を増やしたり、お偉方の弔電拝読があったり……。亡くなった方への畏敬の念よりも、残された遺族の世間体を整えるための舞台作りをしているだけではありませんか。

故人を尊敬し、さんびの中に魂を主にお渡りする。信仰とさんびをもって、送るのです。遺された家族のためにするのではない。

それ故、わたしたちもキリストの名にふさわしいお別れをしたい。子羊の群れの葬儀は、「よみがえりのいのちの喜び」と呼ぶことにします。そして、前夜式・告別式の二回にわたる儀式をやめ、告別式一回だけにします。

子羊の群れによる葬儀を希望されるなら、葬儀社の言われるままに葬儀の日程や規模を決めるのではなく、かならず事前に事務局にご連絡下さい。この新しい様式は、古い慣習の強い地方では通用しないと思われるかもしれませんが、そんなこ

とはありません。葬儀社は、基本的には、遺族の意見を優先してくれます。また、葬祭係から葬儀社に子羊の群れの様式を説明します。

2010年5月26日

(2010年8月号ぶどうの木より転載 2012年5月3日一部修正)